

第5回 JLPP 翻訳コンクール 独語部門講評

日本文学研究者、ベルリン自由大学日本学教授
イルメラ・日地谷＝キルシュネライト

JLPP 翻訳コンクールの審査は、この第5回が私にとって初めての経験であり、きわめて学ぶところが多かった。日本の作家の4作品を特定の視点から読む機会を得て、原作に潜在する意味および効果を目標言語で再現する多様な可能性を知ることができ、さまざまな訳を比較して、それぞれの長所と短所をルーペで見るように観察できた。どの訳にも一長一短があり、どの訳も完璧ではない。しばしば些細な誤り、不手際、誤解もある。問題個所のより優れた訳も見つかる。テキストは「正確」に訳すべきだと言っても、さほど容易でもなければ単純でもない。正確さにも様々な側面がある。語の意味の正確な再現なのか、コンテキストの中での役割を担う表現のニュアンスを捉えることなのか。私からすれば、訳者がテキストのトーンを的確にとらえ、統一の取れた文体を探し当て、それぞれに適切な表現を与えることだ。

個々のテキストの難しさは、それぞれ異なる面に表れている。例えば野坂昭如作品の場合、確実に話の滑らかな流れを保ち続けることであり、技巧に流されず回りくどくならず、また例えば1945年3月10日という日付の意味が伝わる訳になっているかである。これに対し田辺聖子にあっては、軽やかでさらっとした筆致を再現しながらも、全体のどこを取っても共感できる訳でなければならない。難しいのは登場人物に与えられた名前で、日本語や漢字が分からなければそのコノテーション（含意）は分からないが、多くの訳者はただテキスト通り訳しており、それでは伝わらない部分が出てくる。人名の個々の漢字の意味を説明する訳し方もあるが、その漢字を挙げていようとしまいと翻訳としては稚拙である。それより巧みな訳し方としては、その名がもつコノテーションを言い換えて説明することであり、例えば「和子」という名が好まれるのは昭和の「和」であるという説明だ。

もっとも複層的なテキストはおそらく伊藤比呂美の作品で、全体としては軽くユーモラスな感じも与えるが、その中には二つの異なるジャンルが織り込まれている。冒頭は典型的な落語の「枕」スタイルで、本題に入る前に語り手の女性が登場して、観客（読者）の注意と好奇心を呼び起こす。本題部分は人生相談の形をとっている。ひとつの訳は、こうした設定を特別な工夫によって見事に訳出していると思われる。一種の「地の文」をイタリック体で目立たせ、落語の「枕」のように語りの枠組みを提示している。また、「人生相談」の部

分では、ドイツの人生相談欄によくあるように一人一人に適切な仮名を与えている。これによって、このテキストの本題部分がドイツの読者に際立つ構造になっている。さらに、この訳は他の訳とは異なり、落語の下町口調をベルリン方言に移し替えている。私自身は方言を別な言語の方言へと訳すことは問題があると考えるが、この訳の場合にはその効果に納得がいく。この訳は、オノマトペの創造的な転用などほかにも優れた点を持っているが、選考委員の中からはこうした創作的な訳は翻訳の枠を超えているとの意見も出た。それに対し私がこれを推薦したのは、きわめてプロフェッショナルな訳であると同時に、優れた翻訳がいかに幅広い形を取りうるかを誰の目にも示す良い機会であると考えたからである。